

ある神経症少女への治療的関わりからみた伝統的 農村の「家」の家族力動と前思春期の精神力動

—少女「きりん」の跋行をめぐる—

安 藤 嘉 朗

YOSHIAKI ANDO

弘前大学医学部神経精神医学教室 (主任 佐藤時治郎 教授)

(昭和57年3月18日 受付)

KEY WORDS : childhood neurosis
preadolescence
family dynamics
socio-cultural psychaitry
sand-play

はじめに

従来、精神医学は病者の精神世界を、その個人が生きる社会から切り離れた形で対象にし、精神障害を個体の脆弱性としてのみ捉える嫌いがあり、そのために病者理解にも自ずと限界があったように思える。

私たちは既存の精神病理学や精神分析学を踏まえ、超克する意味で、治療場面に社会・文化精神医学的立場を取り入れ、個人の精神生活を取りまく社会・文化的世界全体の中から理解していこうとする診療活動をしている。

私たちの作業とは、病者との「出会い」の状況において表出される事象を受けとめ、病者と治療者(すなわち私)との「共感」の世界という治療の舞台で彼の「生活史」と「共時的な関係性」を眺め合うことによって現在の彼らを確認していくことであると考えている。具体的な病者理解の方法としては、病者と精神医療の出会い状況がどのような社会構造の中に置かれているかを見つめながら、病者と出会う治療者自身をも対象化しつつ、病

者の体験の詳細な観察と記述を行い、その体験内容を性格・生活史・発病状況との連関から力動的に分析し、さらに社会・文化的文脈の中で理解して行くことが必要と考えている。

このような活動の中で出会ったのが仮名を「きりん」という一少女を中心にした「ムサシ家」の人々であった。きりんは不安、ひきこもり、転換症状を主症状とした小児神経症であり、その精神世界は父親の自我理想のイメージをひき継ぎ、過疎の村から移住した自らの「家」の新しい村での緊張と7代女系の伝統的農村家族の現在における歪みを反映していると思われた。治療としては、「箱庭」を用いた非言語的交流、つまり表出する媒介を用いつつ、同時に家族との話し合いの中で家族内の関係を整理し操作していった。このような治療的経過において、地域社会における「家」と「全体としての家族」(family as a whole)をとらえて行くと、地域社会の中では個々がいわゆる「家」という枠組を背負いつつ関係しあっていること、つまり個人が「家」という枠組における他家との緊張を背景に心理的緊張を強めあっていることなどが知られた。このような「家」を背景にした人間関係の実態は従来の外国より直輸入されたままの「家族精神医学」では捉えにくいものであり、私たちの症例を通して、その生きて

いる日本の地域社会の特殊性が浮かび上がって来るように思えた。

以下、症例「きりん」との治療的関わりの中で村の中のある「家」における人格形成と個々の関係性、前思春期の友人関係の挫折とそれを支えられなかった家族の「歪み」などを箱庭療法の結果を踏えて記述し分析してみたい。

経 過

1) 出会いから

「きりん」は父母に連れられてM病院精神科外来にやってきた。最近、元気がない、悲しがる、物を大きな声で言えない、食欲がなく、ほとんど食事をしない、他人に会うのを嫌い、「他人に悪口を言われているような気がする」という悩みを父母に訴えていたというところであるが、受診時は主に父母が代弁していた。

昭和54年秋、2学期にきりんの通うK小学校の全校児童会の選挙があり、きりんはA組の児童会副委員長候補として立候補した。きりんと同じ「沢部落」の友達で仲の良かった「春子」「夏子」「秋子」はB組に属し、B組の副委員長候補が春子であるため、きりんはこの3人と選挙で争うことになった。結果はきりんが予想外の大差で勝ち、きりんは3人に対してすまないという気持ちもったが、この件をきっかけに3人はきりんから離れて行った。A組には同じ部落の友達がいなかったためきりんは寂しく思った。

昭和55年1月2日に大好きだった曾祖母が心筋梗塞で突然死亡し、その日きりんは急に高熱を出したが一日で下熱するというエピソードがあった。葬式の日には姉と共に弔辞をしっかりと書いた調子で読んだが、その数週間から父の属する森林組合の理事選挙があり、家に人の出入りが絶えず、両親も忙しく子供達の相手をしてやれない状況が続いた。きりんはこの頃から人と会うのを嫌い自室に閉じこもることが多くなった。

K小学校はPTAも含めてバレーボールに最近熱を入れていたが、きりんもバレー部に属し、厳しい練習のため、「バレーがうまく行かず、つらい、悲しい」と言い、「でも、バレー部を辞めると友達がいなくなる」と悩んでいた。また、きりんは昭和55年4月から沢部落の集団登校のリーダーとなり、部落子供会の会長、学校の清掃委員なども含め色々の役割を担いきれないほど担っていた。

昭和55年3月28日、きりんは風邪をひき、連日Y病院へ通っていたが、その頃から元気がない様子が目立ってきた。4月24日からは学校より泣いて帰ってくるのが3日も続き家でも泣いて悲しがるようになった。4月26日からは元気がない様子がとくに目立ちはじめ、大きな声で物を言わない、何も食べないという状態となり、泣く理由を問うと、「バレーボールが嫌だ。だけどバレーを辞めると友達がいなくなる……」と言っていた。4月28日、M病院小児科を受診。その後、Y病院とM病院をかけもちで受診していた。M病院小児科では身体的には特に問題はない、「自律神経失調症だろう」「長くかかるが、クスリを出す」と言われた。きりんは元気がないように見える反面、「皆から遅れる……」と勉強の遅れを心配して自室にこもり一人で勉強をしていたりもした。この事態に父母は狼狽し、かかりつけの開業医にも受診させたり、祖母のすすめで何か所かの神サマ*のもとに連れ歩いたりした。こうしてさまざまな医師に診てもらっても父母は満足が行かず、困りはてた様子で5月2日、M病院の精神科を受診した。

1年間M病院に勤務し、その後、非常勤医として外来を受けもっていた著者が初診した。きりんは両親の背後に隠れるようにして入室し、顔つきは沈うつで無欲状であり、周囲に対し怯えるようにしてビクビクしてうつむいており、時々上目使いに診察者を見てい

* 民間医療を行う祈禱師

た。背は高い方だが、痩せており、手足も細く、フラミンゴのような印象を与えた。話しぶりも小声で活気がなく、応答はすみやかであるが、訴えがあいまいで、抑うつ気分は明瞭に訴えず、制止症状も認められなかった。

現在症としては、活気に乏しく、悲哀感、食欲不振があり、子供らしくはしゃぐこともなく、他人の存在をうるさがり、独りで自室にこもるといふ嫌人傾向、「人に悪口を言われているような気がする」という関係念慮、自己への他者の評価を懸念し、自己不全感が目立った。一応、表面的には、「とくに悩んでいることもない」と述べながら、「一番つらいのはバレーボール」と告白する。父母は、診察中ボソボソと小声で答えているきりんに対して「もっと大きな声で」とか、「しっかりしなさい」と盛んに傍から激励していた。

きりんは「勉強をしないと……皆に遅れる」「バレーを辞めると友達がいなくなる」「委員の仕事をやらねば」などと焦燥感を伴う、他者への配慮を示す言葉を述べてもいたが、学校場面での対人葛藤を介して、孤独への予期不安が強まった状態、あるいは過剰な役割を担いすぎて背負い切れなくなった状態ではないかと推察された。診断的には初診時、小児神経症（抑うつ状態）あるいは若年型うつ病（大井の分類Ⅱ型、性格反応型うつ病）と考え、取りあえずイミプラミン 20 mg とジアゼパム 3 mg を投与し、安静と心理的負荷の軽減を計るという治療方針で臨んだ。

5月6日、2回目外来受診。春の連休中もほとんど食事をせず、2口か3口食べるのがやっとで、5月2日に行われた子供会にも出席できず、6日から始まった集団登校にも行けないと泣いたりする状態であった。「学校に行きたいけど行けない」、「足がカクンとなって階段からおちる」、「勉強が遅れる」と辛じて話す様子で、両親は相変らずはっぱをかけているようであった。その後も学校を休んでいたが、5月8日の夕方、A組の友達が3人見舞いに訪れ5分位会った後、1時間ほど

して急に手足を硬くして過呼吸状態となり、30分間位持続した。父母は心配してすぐM病院の救急部に連れて行き、小児科病棟に即時入院となった。しかし、翌日になると医師から「どっこも悪くない、帰ってもよい」と言われたため、父母は精神科を訪れ、「このままではどうなるのか心配だ」と入院治療を希望した。この時は、「足がカクカクする」と言い、歩き方もぎこちなく、元気がなくフラフラしていた。食事も摂っていなかったが、父母はフラフラするのは薬物のせいだと考え、服薬を止めさせていた。家では親類や近所の人達が集まり励ますということもあり、なかなか安静・保存的なひきこもり（conservation withdrawal²⁾の状態におけず、祖父母はきりんに対してかまひすぎ、母親が祖母に「励まさないように」と言うとも祖母はそれを不満に思い、母と祖母の嫁-姑関係が気まずくなるといった複雑な家庭状況であった。家の中の混乱と同時に両親ともあわてふためき、きりんを精神的に支えることが難しいように見えたので、入院治療がのぞましいと考えた。M病院精神科病棟はその構造上児童にとって精神的負担が強いと思われること、小児科病棟では看護スタッフの対応が困難であることから、著者の勤務するH病院への入院を考えた。しかし、いざ入院となると精神科へのためらいもあるのか「9」の日は縁起が悪いとか「5月12日は誰その命日でますい」とか言う祖母の考えに左右されて動きがとれない始末であった。しかし、父母との話し合いの結果、即日の入院を希望したため、父母ときりん、そして著者とが車に乗って直ちにH病院へと向かった。

2) きりんの「家」とその家族について（図1参照）

ムサシ家は現在、奥羽地方北部にあるE町の山間部と盆地部の接する「沢」^{さわ}部落に住んでいる。しかし昭和47年までは「沢川」沿いに約10 km 山間に入った「東谷」^{ひがしたに}部落に住んでいた。ムサシ家の祖先は東谷より数 km

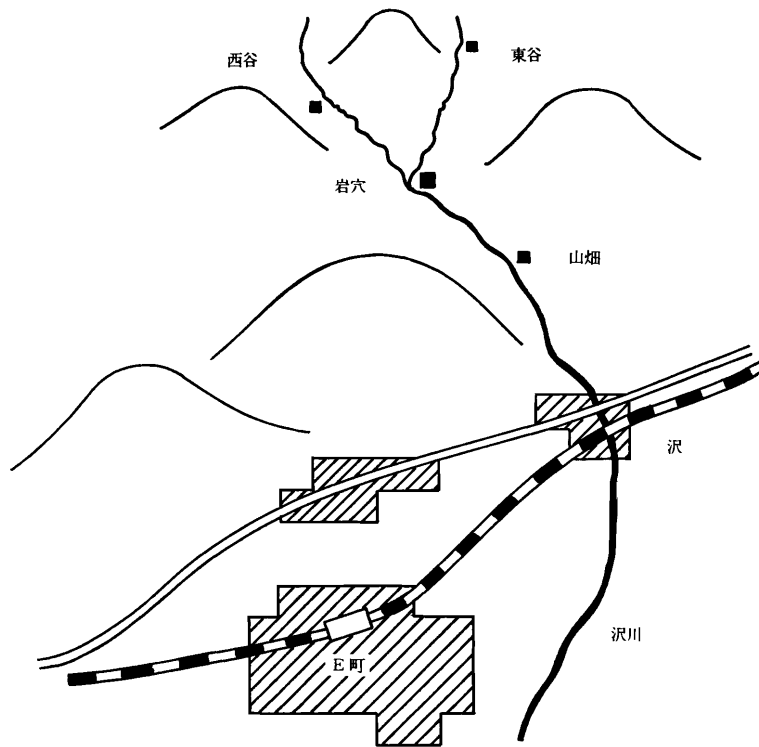


図 1 E 町 の 地 図

沢川沿いに下った下流の「岩穴」部落のS家であり、S家はきりんの母の実家でもある。祖先から語りつがれたところでは平家の落人が集まり、「岩穴に入って隠れた」ということから「岩穴」という名がついたと言われていた。平家の血筋を継ぐという伝説を持ち、代々躰の厳しい家風であった。神仏への信心は厚く、近隣にある「出雲大社」を信仰し、昔は近隣の人達と共に3カ月もかかって四国巡りをする事もあったという。ムサシ家でも裏山に神社を建てたほどであった。ムサシ家は東谷当時より所帯が大きく、「女の強い家だ」と言われ、祖母の代まで女系7代、女性が家を継いできており、きりんの父が久しぶりの男性の家長であった。今までは男が生まれなかつたり、生まれても年下ということで、家を継ぐに足る嫡男に恵まれなかつたためという。

昭和47年、きりんが3歳の時にムサシ家は沢川沿いの下流で国道に沿った沢部落に移住した。当時、東谷部落に7軒家があり（その内ムサシ姓は5軒あった）、西谷部落に3軒の家があったが、東谷・西谷ともに過疎の部落であり、地理的にも不便で冬になると道路が雪で埋まってしまう、病院にも学校にも遠く、不便であり、この事が移転の主な理由であった。移転時は本来ならば一軒一軒、個々に移る話であったが、皆が一緒に移る方が部落の人々にとり気強いということで、県と町から助成金と無利子貸付を受け、沢部落の地主から水田を買い上げ、全部落をあげて移住した。

移転当初、沢部落の中できりんの家族は他の移住した家同様、従来から沢部落に家をかまえていた人々に対して緊張感を持っており最初の2年間位は東谷・西谷・岩穴から移住

した十数軒の家々だけで独自に「自治会」をつくり、入会地の件などを談合して決めていたという。移住後2年目をすぎた頃、ようやくきりんの父は移住した家々の代表という形で沢部落会に出席するようになり、役員の一人名となった。現在、父は沢部落の「幹事役員」であり部落の代表になっているが、部落会に入会した当初は8人いた役員の中で何か決定する際はいつも「よそ者」扱いをされていたという。父は幹事役員の選挙の時もよそ者だからという反対がかなり強かったという。きりんは3歳の時にこの沢部落に移り2年間幼稚園に行っているので友達の中ではよそ者扱いを受けてはいないようだが、「親の年代の人達はきりんをよそ者と見ているかもしれない」と父は言う。ムサシ家の本家は岩穴からE町の中心部へ移り、本家の「跡取り」が町会議員をしたり、町長選挙に出たりもしたが、町長選挙では落選し、経済的にも行きづまったため、現在ではムサシ家が本家扱いをされるようになり、親族をとりまとめている。ムサシ家には沢と東谷に合わせて2町8反歩の水田があるが、農業に加えて父は沢部落に来てから木材業をはじめ、他人の山林の売買をして成功し、経済的に成り上ってきており、今年初めからは地域の森林組合の理事にもなっている。ムサシ家の土地の名義は父と祖母の弟で分けられているが、家長として父がすべてをとりまとめている。近在でも家屋は大きく、裕福な家庭として知られている。

ムサシ家には現在きりん以外に父母、祖父母、姉が同居しており、昭和55年1月までは曾祖母も健在であった。以下、ムサシ家の人々について述べる。（図2参照）

父は41歳、4人同胞の2番目、長男であり、下の2人の同胞は父親が異なっている。木材業と農業を営み、森林組合の理事をしている。ムサシ家では7代ぶりの男の当主であるが、物腰は低く、穏やかな人柄であり、仕事はバリバリするらしい。きりんの教育にも

熱心で、PTAの会合にも積極的に参加し、PTAの学年部長もしている。父親自身は岩穴分校で小学校時代を送り、中学校はT町の中心部に下宿をして通い、高校はこの地方では伝統ある進学校であるN高校に学んだ。その後、大学進学希望が強かったが、田畑も広く、家長として働かねばならず、祖母の反対も強かったため、進学をあきらめて農業を継ぐことになった。上級進学ができないことが分ってからは気落ちして高校2年時からはほとんど勉強をしなくなったという。自分が希望に反して進学できなかったこともあって、子供達の教育には人一倍熱心で、できるだけのことはしたいと述べ、子供達が教師になりたいのであれば教師になるよう援助したいと言う。子供に対しては寛容な面が目立ち、衣類などにも贅沢をさせている。父は現在沢部落の幹事役員をしており、ムサシ家の親族のリーダー的存在でもあり、木材の取り引きで産をなし、経済的に成功し、社会的な自負心を持っている。家の中にあっては祖母と母の間で、母をもり立てようとするが祖母が口うるさく当たり散らすため、両者への積極的な介入をできかねている。

母は35歳、岩穴のS家より見合いをして嫁いできたムサシ家にとっては絶えて久しい「嫁」であった。母はきりんが3歳の時まで、家事をしていたが、それ以後、日中は外で働くようになり、木工製作所につとめ、昭和48年からは学校給食センターにつとめている。きりんの世話は今まで祖母がすることが多く、母もそれに甘んじており、入院当初はきりんの最近の状況も詳しくは知らず、教条的な態度や言葉できりんに対応するのが目についた。子供の躰に戸惑ったような、ぎこちない印象を与えた。やや肥満体で、外向的な性格であり、物事には穏当な対応をみせる。家事は、夕食のあとかたづけ位はするが、食事の仕度はほとんど行っていない。祖母については「うるさく、細かく、神経質……」とネガティブに評価し、死んだ曾祖母については

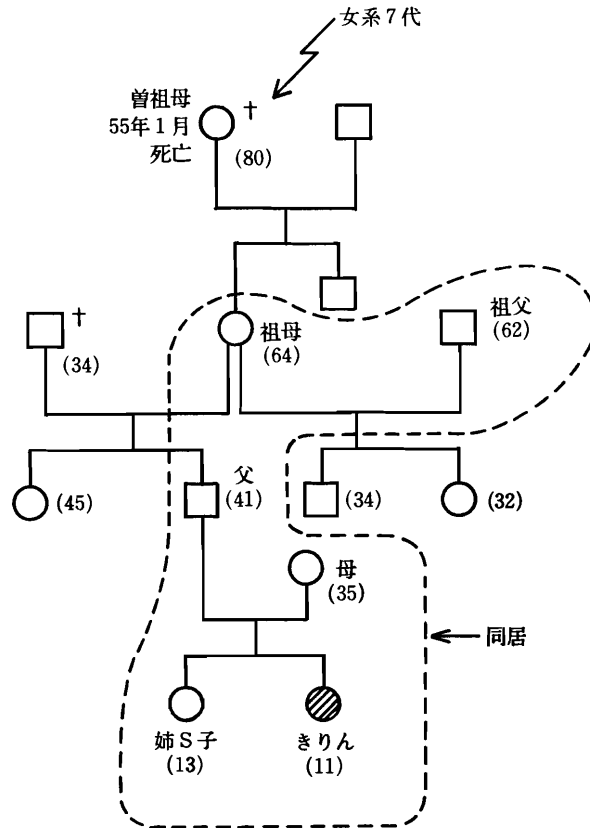


図 2 ム サ シ 家 の 家 族

「他人思いで、やさしかった」とポジティブに評価している。祖母に対しては不満を持ちながらも祖母との葛藤場面からは逃避的である。母自身、きりんの躰に祖母の干渉があって思うように関与できないことを自覚しており、間接的に干渉を控えてもらうように発言したこともあるが、かえって祖母の不満を買い、腹を立てて当たってくるので困ってしまい、「自分が話し下手でまずかったのかもしれないが……でも困ったこともある」と述べ、祖母への攻撃は抑えてしまい、家の中では控え目にふるまっている。

祖母は64歳、ムサシ家の7代目の家長であった。ムサシ家は代々男子に恵まれず、祖母には弟がいたが年がかなり離れており、農家

の機能を考えると祖母が婿養子を取り家を継がざるを得なかった。最初の婿は34歳で急死し現在の祖父は2度目の婿である。ムサシ家では女性が中心になって家を切り盛りしてきた長い歴史があるが、祖母は神経質で細かいことまでうるさく述べたてるために祖父が家の中を丸く治めようとしているらしい。きりんの母に対しては朝早く、家族の起きないうちに説教することがよくあり、オテンバで反抗的な姉のS子に対しても「S子はだめ」といつも言っている。祖母は姉S子を叱ることで暗に母を責めているような面もあるらしい。きりんは曾祖母にとっても、祖母にとっても「いい子」であり、おとなしく、言うことにも素直に従い、祖母はきりんに対して細

かいところまで干渉していたという。治療初期には祖母が心配のあまり、親類の者にきりんを励ますように頼んだり、神サマに何度も見せたりしていた。父母が「あまり励まさないように医師から言われてきたから…」と伝えると、「お前らが私のことを悪く言うからだ」とかえって家族に八当たりして食事をつくらなくなったりしたこともあった。祖母は曾祖父に似ていると言われており、物事に対してくどく、心配症であるらしい。丁度、姉のS子が生まれる頃に肝臓を悪くして、同時に歩けなくなって、足が曲がり、一時は腕をひろげて歩くようになり、周囲から「奇病」と言われたこともあるという。それ以来、身体のことを気にし、ちょっとした心配事であっても胸が苦しくなり、足がふらふらし、情緒的にもイライラして人にあたりたりする。そのため家族は祖母に対してはあたらずさわらずの対応をしてきたらしい。先祖代々、土俗の神さまへの信仰が強いが、祖母も近隣の「稻荷さま」と「出雲大社」を中心にさまざまな神サマの所を歩いている。今回もきりんを何回か場所を変えて神サマに見せたり、「こうなったのは母親の信仰心がうすいからだ」と母を責めたりもした。外面的にはおとなしく、どこかオドオドとした、気弱な印象を与える人柄である。

父の実父は34歳で急死した。その当時、ある神さまから「障って死んだのだ」と言われたが、今回のきりんのエピソードに対してもこの時に障ったものがきりに乗り移ったのだと祖母は考えていた。

現在の祖父は62歳、祖母の前夫が早く死亡し、農家としては家を支えるために男手が必要であるため、ムサシ家に婿入りすることになった。夏場は農業をし、冬場はきりんの叔父にあたる実子が大阪で土木関係の仕事をしていることから、大阪へ出稼ぎに行く。いつもニコニコしており、家の中では良いおじいちゃんに通っている。口うるさく、神経質な祖母とはかどが立たないように暮している。

両親ともに「おじいちゃんはいい人だ……」と評価している。

曾祖母は昭和55年1月2日に心筋梗塞にて80歳で死亡した。やさしい人柄で、きりんは普段からよく曾祖母の部屋で話をしたりして遊んでいた。祖母と母の仲たがいが曾祖母が中に入ってまとめていたが、この曾祖母の死亡後、祖母と母の対立が表面的に浮かび上がってきている。曾祖母は家では「おばあちゃん」と呼ばれ、祖母は「ばあさん」と呼ばれていたという。

姉のS子は13歳、きりんより2歳年上で誕生日が同じで、K中学校2年生である。神経質な反面おてんばで祖母から嫌われているが、そのことは微塵も苦にしていない。見るからに活発でハキハキしており、ボーイッシュな感じの女の子で、自分の不満は直接相手に伝えてくる。父母はS子ときりんの性格は正反対だと言い、教師の話でも姉はきりんとは逆に馬力があることで有名で、成績は良かったが我を張るため小学6年時には友達に反感をもたれて嫌われ、そのため学級の役にもつげなかった。中学に入ってからはずいぶん自分を抑えるようになり、皆に受け入れられるようになったらしい。きりんとは中学1年まではよくケンカしていたが、最近きりんが食物をS子に譲ったり、S子がきりにあたる際にもきりんがとぼけるようにしてS子を立てるようにしており、ケンカになることもなかった。S子は将来は教師になりたいと小さい頃から考えており、進学校である父の母高のN高か、F高に行きたいと勉強をしている。きりんもそれを見習い、姉に負けじと勉強をしていた。S子はスポーツは苦手であり、「きりんはスポーツが得意で、スポーツの面でも皆に期待されていた」と言う。妹のきりんのことは「内向的な性格だから」と考えている。自ら将来家から出たいと思っており、「家はきりんが継げばいい」と述べている。

3) きりんの性格について

内気、几帳面で責任感が強いと周囲から言われている。「周りの目を気にし」、「皆の役に立ちたい」という他者に対する役割アイデンティティ (Rollenidentität)³⁾を求める傾向が強い。姉と同じように行動し、負けまいとする自我理想の高さをうかがわせ、家ではテレビを1時間しか見ないと心に決め、自室で勉強するなど、いわゆる「頑張り屋」であった。また、おとなしく、あまり要求もせず、はっきり物を言わず、「やさしい子」であったため、祖母は可愛がりすぎるぐらい可愛がっていた。担任のC先生の話によると、学校では相手に不快な気持を与えるのではないかということをついつも気にして、自分の気持を殺してでも他人を立てるような面があり、他人の目をいつも気にしていたという。クラスの中ではリーダー格であり、勉強も成績の上では数番以内に入っているが、能力があるというよりまじめにコツコツとやるタイプで、思考面で硬く、融通のきかない所があり、実力テストは学内テストより成績が下がる。間違いをひどく気にするという。内に秘めた負けん気があり、マラソンやスキーの際も顔色を変えて頑張り、上位に入っている。

入院中も他患への自分の影響を気にし、時に自責的となり、母の話し声にも他患に迷惑をかけるのではと気を配っていた。ベッドメイクも几帳面で、過剰な程に四すみをピシッと整え、皺一つ、塵一つあっても気にしていた。

4) 生活歴について

昭和44年、E町東谷部落に生まれる。3歳時に過疎のため部落中で沢部落に移転した。幼少時は近所に同年輩の子供もおらず、幼稚園に入ってから初めて余所の子供とのつきあいが始まった。2年間、幼稚園に通ったが、最初は通園したがらず、奥の部落の「山畑」から来る同級生と一緒になければ通園を嫌がり、いつもバスを見て、その子がいるのを確認してバスに乗ったという。3歳時より母が外に働きに出ることになり、それ以後は祖母の

世話を受けることが多く、曾祖母からも世話されて育った。小学校1年の時から姉と共にピアノを習い始め、姉は途中で止めてしまったが、きりんは今でも続けている。小学校4年までは姉と2段ベッドで寝ていたが、以後は自分の部屋で寝起きし、割に自立的な生活をしてきた。小学校高学年になると、将来は教師になりたいと勉強はしすぎる位にしていた。学校ではバレーボールの選手とスキーやマラソンの選手もしており、クラスの保健委員などをしてきたこともある。昭和54年夏には姉と2人だけで大阪の叔父のもとに行ったりして元気にしていた。秋の児童会の選挙で副委員長に立候補し、同じ沢部落の友達と選挙で争ってから交流を失い寂しい思いをしていた。昭和55年1月には曾祖母が死亡し、それから間もなく行われた父の森林組合理事の選挙で家中がゴタゴタした頃から、自室に引きこもりがちとなり、元気がなく、「やせたい」と言っていたが徐々に食欲もなくなっていった。同年2月にはバス定期乗車券の証明書を職員室にどうしても貰いにいけないということがあった。きりんはスキーの距離競技の選手であったが、2月のスキー大会を前にして同級生の「まり子」との競争心を強め、緊張していた。以前から交際していた親友「うさぎ」との交換日記にも変調がみられている。

きりんとうさぎの交換日記から……

2月2日(うさぎから)、町民スキー大会はがんばるのよ。でも、この頃のきりんは変よ、悩みごとがあるんならそうだしなさいよ。

2月5日(きりんから)、……私、まり子さんみたいな性格だいさらい。

2月27日(きりんから)、今日、学校に行ったらみんなが「髪きって、かっこわりい」といって、せめておせじでも言っていればよかったのに……。私一人のこされた感じ、もう私たったの一人ぼっち。もう学校なんかいきたくない、やっぱり友がいなければさみしい。でも私はくじけないわ、いつもニコニコしているのが一番。ゆり

子がいつも私からうさぎをうばっていく、にくい。私やっぱりとのこされる……。

3月18日は卒業式できりんは副会長の役目で送辞を述べたが、暗記していた文句を途中で忘れ、つまってしまい、しばらく周囲がシーンと静まりかえりつらい思いをした。その後、食事の量がさらに少なくなった。

3月26日、きりんはうさぎに一通の手紙を出している。「うさぎさん、6年生になってもずっとお友達でいきましょうね。私にとっては、たった一人の大切な大切な人なのです。私いつも給食時間になると、私だけ一人とりのこされたようになるの。だってあのゆり子がサ、私に話させようとしてくれないんだもん。私にマラソンでぬかれることばかり気にして……。私はうさぎにはぬかれてもいいの。お手紙下さいね。」

昭和55年4月、小学6年の新学期になり、クラスの席変えがあり、うさぎのまわりに女の子が何人か坐るようになった。それまではうさぎの方から必ずきりに声をかけて近寄って来ていたのが、今度はきりんが声をかけないとうさぎはまわりの女の子と遊んで話を止めないと感じ、同じ部落の友達を失なった上にうさぎとも仲が悪くなったように感じた。この頃、学校でも声が小さくなった。6年前期の児童会の役員改選にもきりんは立候補せず、クラスの委員長になりたいと立候補したが男の子に投票で小差で負けて落選した。3月末には風邪をひき、バレーボールの練習もつらくなり、元気のない様子が目立ち始めた。バレーボールでは左前衛でレギュラーだったが、エースアタッカーの「たか子」が勝気でいつも「きりんには絶対負けない」と競争心を丸出しにするので嫌な感じをもち、バレーボールのコーチである男性の教師にも、「どこかへ行ってしまえ」と言う程の嫌悪感をもっていた。しかも4月からは沢部落の集団登校のリーダーをする予定になっており、対立した友達と一緒に登校しなければ

ならない状況にあった。

5) 治療経過について

治療終了後に治療経過を振りかえってみて、きりんの変化から経過を5期に分けた。

第1期；母と共に入院させ、きりんの内面を探ろうとした時期。

5月9日、入院までM病院の玄関で1回、車内でもH市街に入ると1回過呼吸状態となる。車の中から外へ手を出し、父母に注意されても頑くなにやめない。H病院に入っても、息を荒くし、膝をガクガクさせてなかなか前に進もうとせず、「嫌あ、嫌あ」と小声で体をくねらせ、母はそれに対して「すぐ帰るから」とごまかすように対応する。表情はうつろで周囲のちょっとした物音にもビクッと反応し、小声で頭が痛い、頭一杯に張る感じ、胸が苦しい、何となく不安な感じで、歩く時に膝がカクンカクンとなり疲れると言う。抑うつ症状に加え、ヒステリー性の症状を思わせた。マイナートランキライザーを投与し、プレイルームで接触して行くようにした。同時に点滴を開始した。

5月11日、母はきりんに対して教条的な態度をとりがちであり、娘が食事をとらず、自分の言うこともきかないと音を上げてしまい、看護婦の手をかりたいと援助を求めている。

5月13日、食事はほとんど摂ろうとせず、不安そうに眉間に皺を寄せ、膝の先に感覚のないことを訴え、申し訳なさそうにしている。レクリエーションの時には「学校と同じだ」と言って泣く。

5月15日、跛行が著明になる。母には「入院してお金がどのくらいかかるのか」と金銭的な心配をしている。「うさぎさんとは今年になって席が離れ、自分も行かず、仲がだめになった気がして……」、「バレーはつらかった」、「母さんはうるさいが嫌いじゃない」、「ばあさんはこわい」、「食べたいけれど食べられない不安がある」などと小声で述べる。

5月19日、きりんが母をうさぎがっているような面もあり、母が教条的な面ばかり見せる

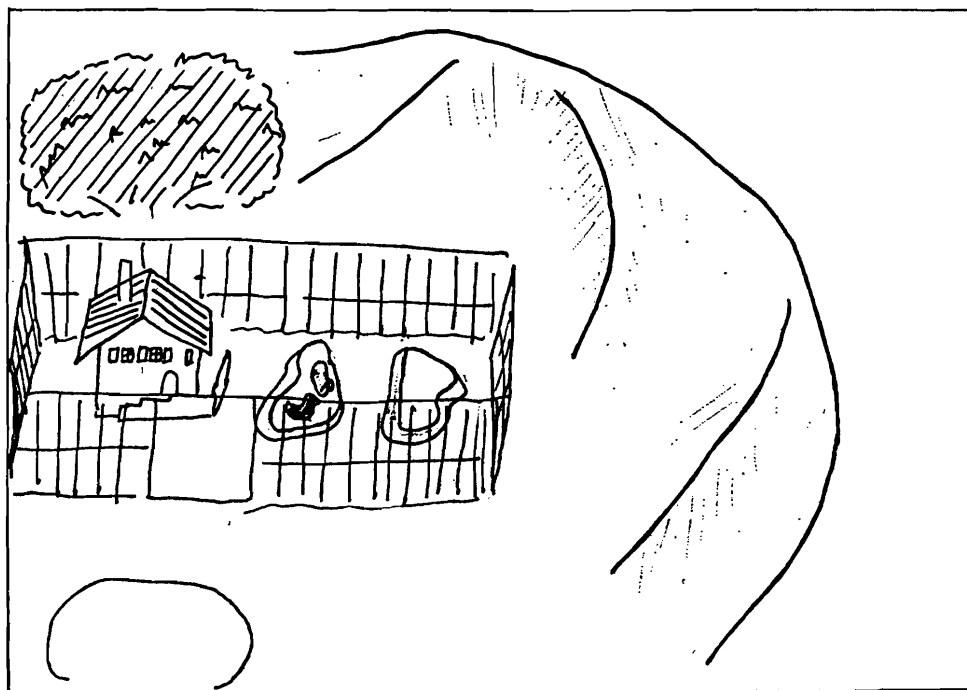


図 3-1 箱庭第1回

ために、一時、きりんを一人で入院させることにする。きりんは母に「何も分ってくれない」と言う。

第2期；きりん単独の入院となり、プレイルームでつきあいながら箱庭療法を始めた時期。

5月22日、修学旅行に皆んな出かけてしまふと取り残される不安が強くなる。

5月24日、時々病院に来る父母、とくに母親に対して「身体的なふれあいをし、きりんが頼りになるようにして欲しい」、「祖母にはきりんのしつけから一歩下ってもらい、母がどどんつきあうように」と要請する。

きりんに対しては心的な表現の場を広げる意味で箱庭療法に導入、「これで何でもよいから自由につくってみて下さい」と道具を見せると、抵抗なく箱庭をつくり始める。

(箱庭第1回)表題；「**左すみの柵のある家**」

《左中央部に柵で囲まれた家があり、それ

はさらに山の尾根で囲まれる。柵の中の池には水鳥が2羽向きあっている。全体に左側に偏位し、「自己」の内界に閉じこもり、外界に対して恐れを持ち、逃避的であることを感じさせると同時に、内界を指向するきりんの中に守ってやらなければならないものがあることを感じさせた。左下の泉は空虚で、からっぽなエネルギーを思わせる。きりんのテーマとして「家」と「二つのものの対立」が出現している。この箱庭の家は昔の東谷の家を連想させる。》

5月26日、他患のT子より自分の面接が早くなってしまう、T子に申し訳ないとメソメソと泣く。

5月28日、左大腿部の痛みを訴え、「足はなおりますか」と心配する。治療的な意味から祖母の来院を控えてもらっていることから、祖母が母を逆恨みしていることをきりんも知

* ここでいう「自己」とはコングのいう「Self」に相当する。



図 3-2 第 2 回

り、「きりんのことで母さんとばあさんがケンカになってごめんなさい」と言い、また入院してお金ばかり使わせてと自責的になり、「死んでおばあちゃん（曾祖母）の所に行きたい」とメモする。屋上に散歩に出ても跛行が著明で息を荒くする。

5月31日、床頭台の引きだしにベルト、ひもを隠している。死にたいと思い、曾祖母の写真を枕の下に入れ、「おばあちゃんの所へ行きたい」と母に何度か言っている。この頃からかすかな発語があるだけでほとんど緘黙状態となる。

（箱庭第2回）「左上の家、誰もいない道」

《左上に柵で囲まれた家があり、きりんの世界は相変わらず内部を向いているが、右の森へ向けて1本の道ができた。外界への道ではあるが誰もおらず、いまだ荒涼としている。右下の2つの泉ではエネルギーのたまりが動き始めている。森とは暖かいが暗く、一度は通り抜けなければならないとこ

ろなのだろうかと考えさせられた。》

6月4日、全く緘黙し、不安そうな表情で周囲の物音に敏感に反応する。きりんとのコミュニケーションの手段として、筆談での応答を受けとめることにする。「自分でも言えることを、お父さん、お母さんが先生に話して、過保護みたいに先生や友達にみられるのが嫌だった」と伝えてくる。

6月5日、病棟ピクニックに母と共に参加するが、途中で「家に帰る」と顔をしかめて道路にかけだし、缶ジュースのふたで手首を自傷、浅いが傷をつける。「こんなところに来るなら修学旅行に行きたかった」と紙に書く。

6月7日、（箱庭第3回）「道のむこうの親キリン（キリンの家族の分割）」

《左上に柵で囲まれた家、左下の池と2隻のボート、中央上の池と2羽のフラミンゴ、右下の森、左上から右下への道と、道で分断させられた親キリンと子キリン2頭と羊からなる。自我活動が少しずつ表面に

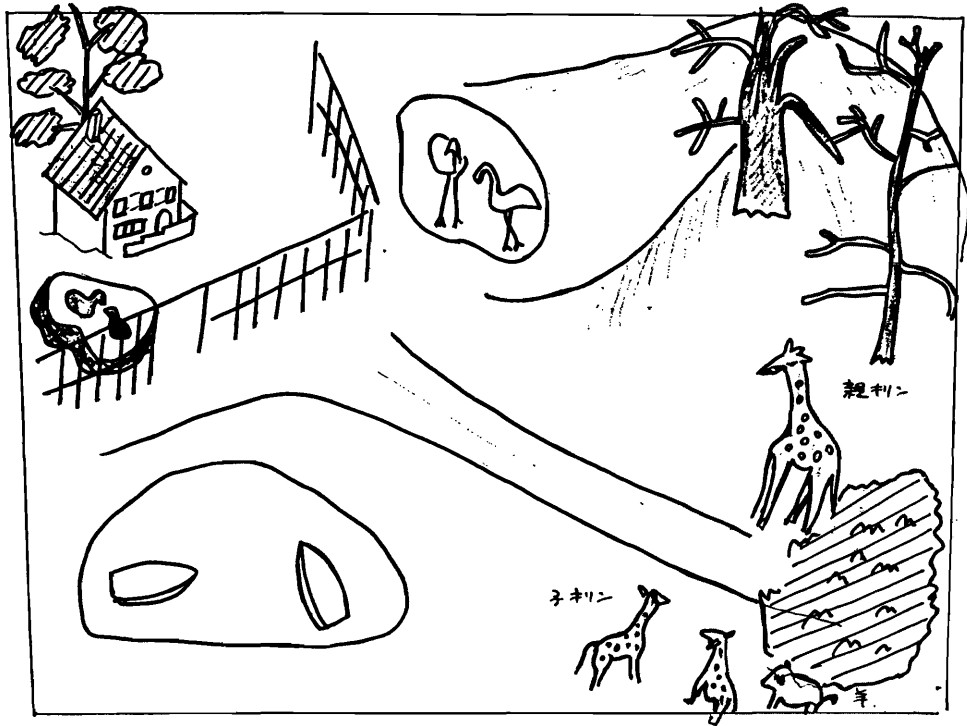


図 3-3 第 3 回

出ているが、不安が強く、自己の挫折感、親と子の断裂など、家庭感情の問題が提起される。右上の社会的領域では実りない枯木の世界が広がる。子キリン2頭の中の異分子としての羊は祖母なのだろうか、治療者なのだろうか。≫

6月11日、以前連れて行かれた「神サマがこわい」と盛んに胸をかきむしる。苦悶様で「姿は見えないけれど人が憑いているような気がする」と泣き、過呼吸状態となり病棟のドアを叩いて「帰る、帰る」とかすかに言う。5月11日が学校の運動会で、「あんなに毎朝、マラソンの練習をしていたのになんにもならなかった。生まれてはじめての悔やしさだ」と友達関係の緊張、入院の不本意さを伝える。「きりん、この頃眠れない、いろいろな神サマのところに行った時のことを思い出して…死ぬほどこわかった」と転々と連れて歩かれた神サマの所での不安を思い出し伝

えてくる。治療者としては、きりんの告白を受けとめながら、超自我の緩和と父母に甘えることを許すような態度をとった。

6月13日、看護学生が自分ばかりに付きそっているのでは、緊張するし、同室の人にも悪い気がする」と筆談し、「たか子が『わたし、きりんに負けない』というので、負けてしまうのではないかと思いつめた」と述べる。

6月14日、久しぶりに笑顔を見せ、母と一緒に面談室で鍵盤ハーモニカを吹き、うまく吹けないと笑う。きりんの側から紙にメモをして治療者にコミュニケーションをとってくる。

（箱庭第4回）「真ん中の家」

◀家が中央に移動し、上と右は柵で囲まれるが、左上へ道、左下の池にはボートが用意される。親子関係の安定を機に家が中央に半ば開き、「自己」の展開のきざしを思わせるが、まだ外に対して警戒的である。



図 3-4 第 4 回

しかし社会的な豊かさが準備されつつあるのか、右上の山には緑の葉がつけられ、どこことなく殺風景な中にも新たな活動が予測される。「二つのものの対立」も示され続けている。》

6月20日、表情は柔和になってきているが、跛行は著明で、左足をつっぱらせ右膝をカクンカクンと折って歩く、知覚、聴覚、運動も左側の機序が落ちていようにオドオドしながら伝えてくる。

6月21日、「左の目がぼやける」と何度か訴える。

（箱庭第5回）「森へ向かう馬、右上で遊ぶ3匹のキリン」

《左中央の柵で囲まれた家は門戸を開き、右の森へ太い道ができ、そこを木々に囲まれ白い馬が森へ向かっている。左上の池には一対の水鳥とフラミンゴ、左下の池には一対のボート、右上には親キリン、2頭の子キリンと2頭のロバがいる。下方には花

が現われる。全体として静的な造形から動的なものへ変化し、現実的な動きの予兆を感じさせる。家は左側に置かれ、いまだ「自己」は内閉しつつも、右の森へ「足」の象徴として連想される白馬が走る。左から右への動きは進化のサインとして、また木々にまもられながらひそやかに駆けだすことを予告していたのかもしれない。3回目の箱庭で分断された親子キリンは社会的領域で認識され、親子関係の安定化が願望、予兆として存在していることを感じさせた。》

6月24日、隣のベッドの老女がのどをつまらせたこっけいな場面で大笑いをする。友達のことにはふれるとおちつかずキョロキョロするが、「同じ部落の友達がなくなった上に、うさぎさんの席がえて、うさぎさんから声をかけてもらえず仲が悪くなった気がして…」と筆談で告白する。

6月25日、「お母さんがいると病院のご飯も



図 3-5 第 5 回

食べれると思う」と母になじみ、母が付き添うことを希望する。

6月28日、担任のC先生が来院し、きりんと面会する。きりんは跛行を見せながら、神妙な態度で対面、嬉しそうな表情も見せる。C先生は面会が終わってから、瘦せたきりんのことを思い涙を流していた。母も来院し、29日より再び一緒に入院生活をすることを決める。

（箱庭第6回）「山のふもとを回る馬、親子キリンの団欒」

◀中央に大きな山が築かれ、その周囲に道がめぐり、山には木々と向きあった白熊と黒熊がおり、周囲の道には白馬と茶色の馬が走る。右下には親子キリン、2頭のロバ、子羊がおり、上方にはライオン、ピューマがいる。全体像は分割から調和へと変化する中で、大団円の近さを感じさせる。家においては母ときりん姉妹の連帯と安定をみている「自己」はスピードがつき、生

き生きしたものを感じさせるが、箱庭中央のファリックな象徴としての「山」で2頭の動物の対立が展開し、競争の世界での葛藤の存在を思わせる。友人ときりん、祖母と母の対立なのだろうか。▶

第3期；母と一緒に入院生活を再開した時期。食事も増え、母に対する遠慮もなくなり、柔和な表情になる。母には教条の押しつけは止めてもらい、外出や一緒に過ごす時間の中できりんの困っていることを共感的に一緒に考えてほしい、理解してやってほしいと伝える。

6月30日、「時々目が見えなくなる」が「耳の方は大丈夫です」と記す。食事も増えてきており、点滴を中止する。

7月1日、眼科頼診してもらい、異常なしと言われる。相変わらずの跛行に対して「今度は整形外科に診てもらおうか」と言うとオドオドして息を荒くし、「なんだか分かりませんが、今、自分の気持がおちつきません」と書

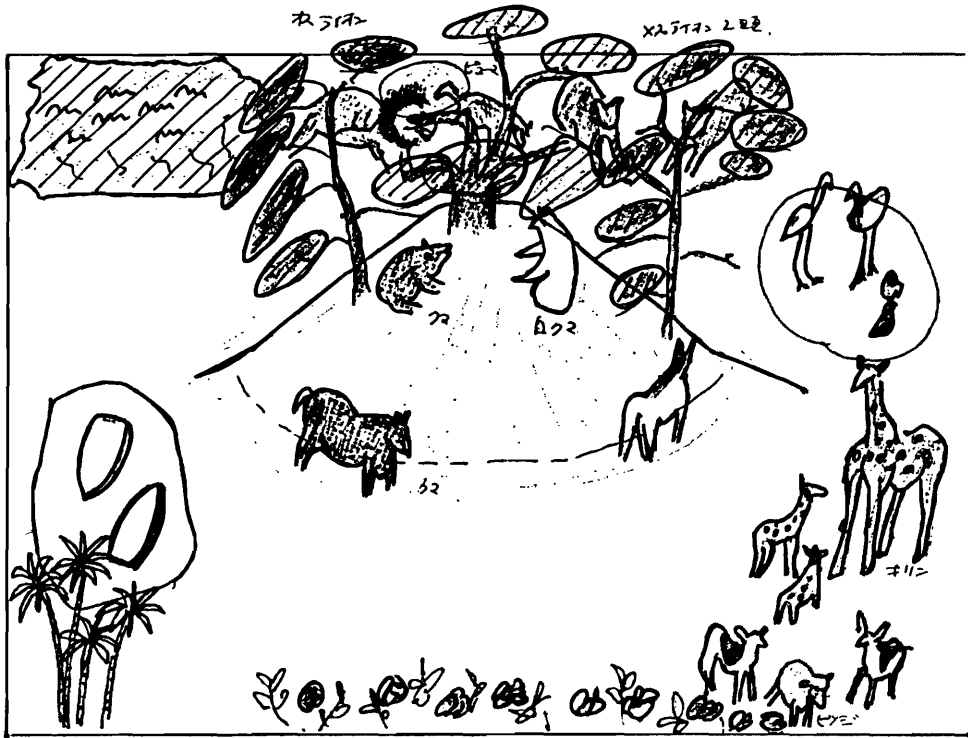


図 3-6 第 6 回

く。

7月4日、髪をいつもと逆に分けるなどし（ふり返ってみると、これは「変身」を意味し、またその前兆と思える）、表情も柔和で、隣の老女に近寄って笑ったり、母と食事を互いにすすめあってはしゃぎ、笑いころげたりする。体重も最低時より5kgも増える。

7月5日、（箱庭第7回）「共存の動物達と5匹のキリン」

《いろいろな動物達の群れが表現され、右上に5匹のキリン、左下の泉をとり囲んで4匹のライオンがいる。動物達が共存し、対社会集団が多様に構成される中で「自己」の整理を始めている。第6回目の箱庭での山のうしろにひそやかに存在していたライオンが中央に現出し、ある程度の攻撃性を取り戻し、深い自我や衝動の領域では、泉のような新たな兆しが見られ、次の活動に備えるような水の補給が行われてい

る。全体としていきいきとした自由な印象を与える。》

7月9日、母と共にレクリエーションに参加し、歩いて行き帰りし、部屋では母がレース編みをしているのを膝をのぼしてニコニコしながら見ている。

7月11日、家に電話をして「もしもし」と声を出し、母にも小声であるが「もしもし」「もしもし」と言って笑っている。声が出て、自分自身驚いたように口をふさいだりしている。跛行の程度も軽減し、足のふるえも減っている。思い切って、整形外科に頼診し、異常のないことを伝えてもらった。この夜、ニコニコして普通の足どりで歩き、「走りたい」と言って廊下を走ってみせ、母や看護者を驚かせた。

第4期；跛行と緘黙が改善してから退院までの時期。

7月12日、主治医宛に手紙を書き、「声もも



図 3-7 第 7 回

う出ます……もう心が沈んだりしません……
7月末の登山に行きたい……それまで退院で
きますか」と問うている。

〔箱庭第8回〕「右上の家（領域の反転）」

≪家が柵で囲まれながら右上に移動し、領域は右に比重が置かれる。右上の家から左下の森へ太い道ができ、右下に大きな池、左上では白い馬と茶色の馬が向き合っている自己の存在が社会・機能的な世界で確かめられたのではないかと思わせる。2頭の馬の対立は精神的な障害として残されるかもしれないが、馬は道はずれ、野放しの自由な、規制をはずされた患児の足を連想させる。≫

7月14日、母と一緒にしゃぎ、看護者とも大声で話し、主治医に対してもオドオドしながらはっきりと話をする。しかし、一方で祖母は父母だけが病院に行っていることで、無視されていると母親を責め、「もう病院へ行くな、きりんがどうなってもいい」とまでも

感情的になって言う。父親に対して母と祖母の間に入って欲しいと伝えるが、「祖母は女の戸主として何でも自分の思うとおりにやってきたんだから……」と父も困り果ててしまう。

7月16日、足が痛いと言布を求めることはあるが、母と共に買物に市街地へ出かけたが、「登校拒否」で入院してきた女の子とバドミントンをしたりしている。

7月19日、〔箱庭第9回〕「4本の道（マンダラ）」

≪中央に柵で囲まれた家、四隅への道が伸び、左右に親子キリン、上に馬、羊、ロバがいて下に池をつくる。家は中央で四方に道を拡げ、「自己」の各意識層への取りくみと、取りまく対集団への自己の展開と統合を示しているのではないかと思われた。≫

7月25日、担任のC先生ら教師2人と同級生8人が見舞いに来る。院外で待ち合わせて会

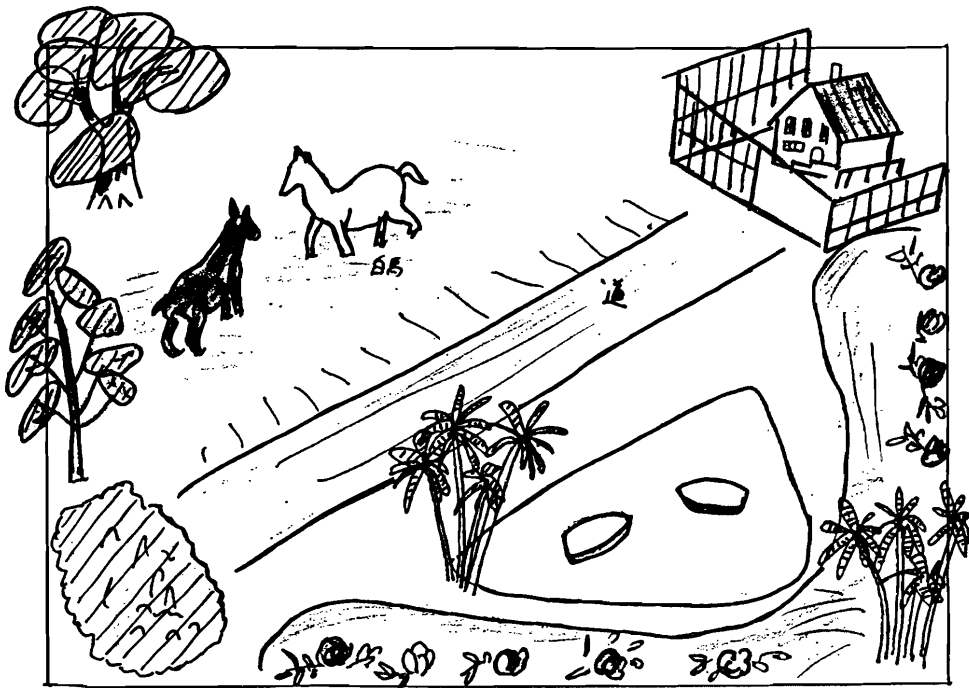


図 3-8 第 8 回

ってもらいが、デパートの遊び場で皆とはしゃいでくる。主治医には気をつかい、希望を述べる時にも顔色をうかがっているが、母には「頼んでおったものを持って来ない」と責めたり、反抗的な位に自己を主張するようになっていく。症状がとれて、きりんは今までのエピソードについて迎合的色彩もあるが、「役目を沢山背負って……学校の役員、子供会もあり……友達とうまくいかなくて……」と述べる。ムサシ家では、きりんが入院して以降、祖母がそれまでの家の中心であったのが、きりんへの対応から始まって父親が主導するようになり、祖母は自分の意見が通らなくなって徐々に脇役になりつつある。そのため、祖母には、近頃、ふてくされた言動が多いという。

7月26日、(箱庭第10回)「橋のあるなつかしい風景」

◀家をめぐるとストーリーの緊張が緩み、のどかでなごやかな田舎の光景が展開され、

左下の乳牛は「生み育む」イメージを与える。右上から左下に川が走り、領域が分断されながらも橋を架けることにより、家庭の問題と精神的な「自己」の問題のエネルギーが対立から調和をとろうとしているようにみえる。神社の傍に置かれた黒馬を祖母とすれば、祖母と母の和解の願望と努力が含まれているかとも思える。いずれにせよ、初回の箱庭から「二つのものの対立」というテーマが認められたが、今回である程度の対立緩和の兆しが見てとれる。》

7月28日から31日まで再び外泊し、学校の行事の「夏山登山」に参加してくる。友達全員とはしゃいだりして頂上まで登ったと嬉しそうに述べる。父母同伴で、友達の前に元気な姿で出て、暖かく迎えられ、皆の中に戻るという保証を与えられたようである。

8月1日、退院。母に対しては「きりんが友達関係で孤立し、一時、現実から避難したも

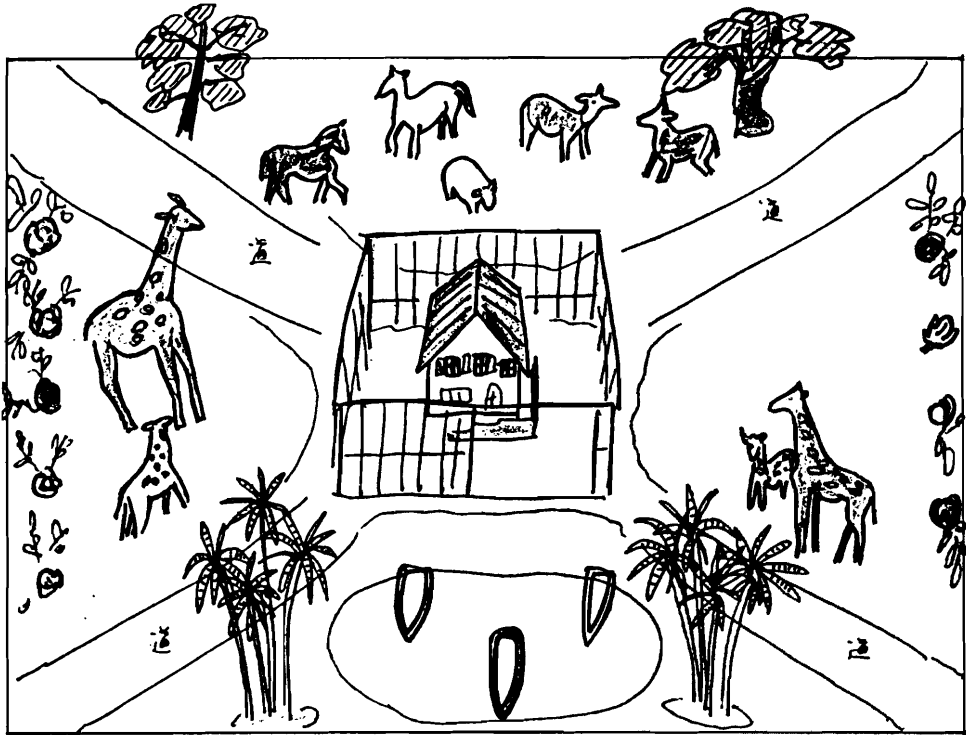


図 3-9 第 9 回

の、母ときりんが同盟することによって、きりんは母に依存し、外に対しての構えを再び作り出して対応できるようになったのだろう」と話しておく。

（箱庭第11回）「待ちのぞむ家」

《退院当日の午前につくられる。右上の丘に柵のない家が置かれ、少し長い階段とアーチに左下からの道がつながる。道の両脇には、ソファと揺り椅子などがおかれ、スイートホームの印象を与える。家は丘の上でアーチを開いて待っており、家へ帰る嬉しさが伝わってくるが、なお、長い階段にはきりんの不安を感じさせる。しかし家を背負った自己の社会的機能への願望は伝わってくる。ここで初回からのテーマであった、自己とも思える「家」は内閉から周囲への展開の段階を経て、社会的領域に達したと考えられる。》

第5期；外来通院以降。

8月8日、父、祖父母と共に来院する。来院の前に病院の近くの神社でお祓いを受けてきたという。友達と一緒にプールに行ったり、家でも入院前より何でもはっきりと言えるようになったと父が伝える。

8月12日、母の言うことをきかなくなり、反抗的になったりしたが、母はそれを成長した証拠と考えている。友達との電話のかけあいで家の電話を占領し、友達とのハイキングの世話人になったりもしている。友達に後期の児童会長に立候補したらといわれ、父母は心配で反対しているが、きりんは皆からすすめられたからやるんだと述べ、両親の言うことをきかないという。

8月19日、部落の盆おどり大会で子供会長として挨拶をし、「うまくやったよ」と母親に話した。取りあえず、精神科と縁を切るという意味で受診を終了とし、きりんには「勉強も遅れているんだし、児童会長になるのは無

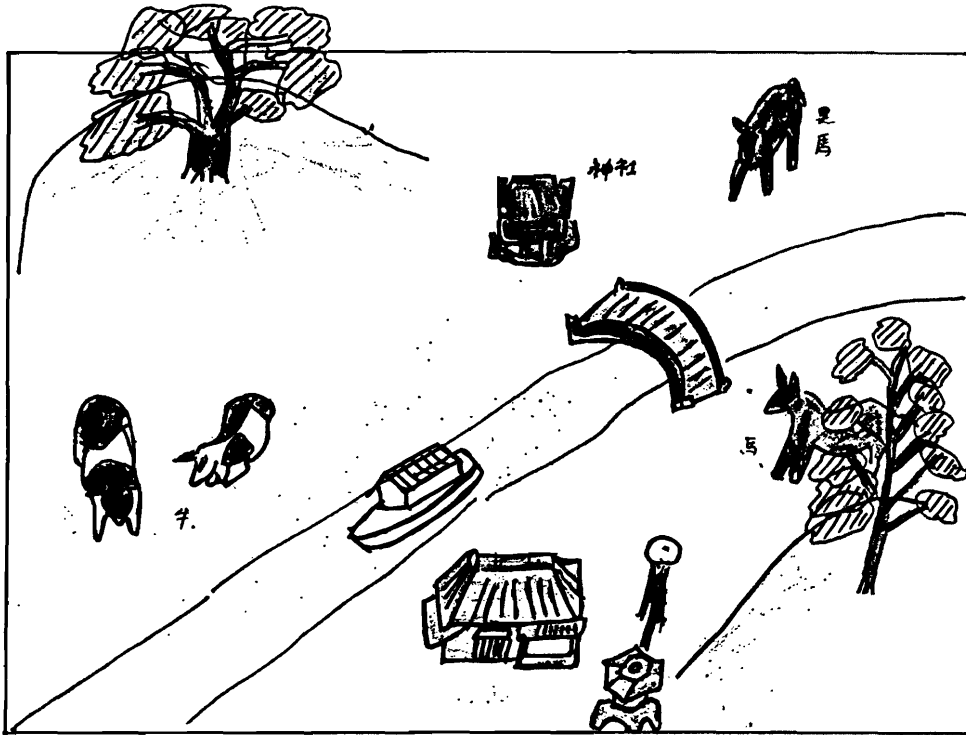


図 3-10 第 10 回

理しない方がいいよ」と伝えて別れる。

以後、新学期が始まり、問題なく通学し、学校でもはっきりと物が言えるようになり、家では祖母に対してはねかえして自分の意見をはっきり述べるようになったという。秋には後期の児童会長に選ばれて、とくに変わりなくすごしており、昭和56年7月に電話で連絡を受けたが経過は良好である。

症例の考察

1. 性格形成について

症例きりんのあり方で目立ったのは対他的配慮が強く、学校や村の子供達の中で「役割」を過剰に担う構えであり、それは自責、とり残される不安、自分はもう駄目だという悲観的な態度として、病態化して現われた。

きりんの生まれた家は過疎の部落で、その中でムサシ家の人々は代々受け継がれて来た伝統と誇りをもっていた。父は大学進学

の望を持ちながらも農家の家長としての役割を果たさねばならず、祖母の反対も受けて進学を断念し、父の情念は村の中での「家長」としての実践に方向転換されて行く。きりんが3歳の時にムサシ家は同じ部落の家々と一緒に新しい部落へ移住し、移住当初の2年間は移住した十数戸の集まりだけで「余所者」として結束していたが、以後は次第に新しい部落の中に広がって行く。その際には周囲との間に、強い「緊張」があった。また、そういった状況の中で父は部落の代表にまでなり、木材商としても政治的、経済的に力をつけて行くが、その過程で父も家族も部落の中でさらに心理的緊張を強いられたと思われる。

父はきりん姉妹に直接に期待を示してもきたが、ムサシ家の伝統、父の果たせなかった進学の夢と部落内での「家」のあり方はきりん姉妹の高い自我理想を形成して来たと思われる。そして、それはきりんの進学し教師に

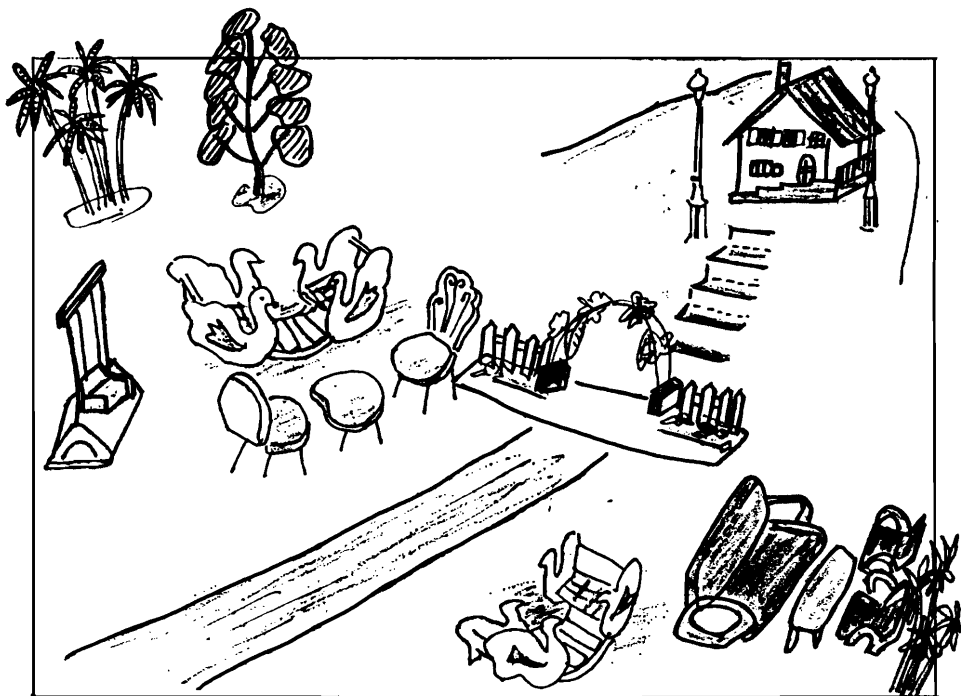


図 3-11 第 11 回

なりたいという希望を生み、さらに周囲への家ぐるみの心理的緊張とも重なって、対他的配慮が強く過剰に役割を担おうとする態度となって現われ、友達関係の中での緊張を生んで行くことになった。

このようなきりんの背伸びした「在り方」は学校、部落での前思春期の友人関係の中で危機 (crisis) を迎え、きりんはその心的負担に押しつぶされていったと言える。

2. 「港」としての家のひずみ

きりんの危機状況は家の中での依り拠がなくなることも平行する。7代女系家族のひさびさの嫁であるきりんの母は家での確固とした養育の位置、役割をもてず、家族内葛藤を回避して家から逃れるように外へ出て働き、きりんの養育も3歳以降は祖母にまかされてきた。姉のS子は学童期近くまで、母と共におり、母を取り入れ同一化するチャンスもあったのか、祖母に対しては反抗して家の中で自らの位置を確かめることができたよう

である。しかし、きりんは神経質な祖母の影響をより強く受けながら、父母や祖母の期待に添って家の中で受け入れられなければならず、祖母と母の動きをうかがいながら情緒不安の中に育ち、曾祖母の所で気休めを見い出していたのではないかと思われる。ところが、祖母と母の間の仲介役であった曾祖母も死亡し、祖母と母との対立が時に表面化し、家の外での情緒的破綻を癒す港としての「家」は十分に機能せず、かえって家族内の葛藤に直面せざるを得ずにきりんは抑うつ的となって行った。母は学校や家庭の養育場面でも祖母に対する気づかいが強く、きりんに積極的に関わりあうことができずにいたのである。

3. 発症に至るまでの状況

①昭和54年秋、児童会の副会長選挙に立候補して、同じ部落で元々そこに住む友達と対立し友達を失ったと感じる。

②昭和55年1月、曾祖母が死亡し、悲しみも

まもなく、父の森林組合の選挙が始まり家に人が集まり、家族全体の緊張の中、きりんはひきこもっていく。

③ 2月、スキー大会でのまり子との競争に緊張を強める。

④ 3月、卒業式で送辞をミスし、自信を失なう。

⑤ 4月、新学期に入り、席がえて親友うさぎの席が離れ、うさぎとの仲が悪くなったと感じ、同時にクラスの委員長選挙でも落選し、自信を失う。

⑥ その後、バレーボールの練習の辛さと、アタッカーのたか子との競争に過敏となり疲弊して行く。

以上の自ら選びかつ縛りつけられるような危機的な局面において、友達関係での緊張はのっぴきならない様相を呈し、四面楚歌の状況の中できりんはひきこもっていく。

4. 治療経過のまとめ

当初、著者は初期のきりんの跛行が固まって行くのではないかという不安と、入院後に緘黙を強めたこと、そしてコミュニケーションの成立しにくいことに焦りと当惑を抱いていた。しかし、きりんの「家」ときりんの在り方を、きりんの生きる社会—文化的な背景から理解することでゆとりを持ち、きりんの様態を受けとめ、間もなく開始した箱庭療法は黙りこんだきりと治療者の気まずさの中で共に育む「土壌」としての場を開き、治療者は徐々にきりんの「語れないが示すことはできるもの」に共感的に接しはじめていた。その意味で「箱庭」は患者と治療者の間での有効なメディアであった。そして、この場はきりんにとっては「共感されて在る場」であったと思いたい。

箱庭の内では、内閉化した「家」が社会的・機能的に次第に開かれて行く過程、「二つのものの対立」の推移、家族像の変化が示されたが、これは自己が「内閉」から外へ向かう展開の経過でもある。そして自己の展開の過程が、きりんの家の新たな部落での緊張を

継時的に再体験して行った過程であるようにも見える。

箱庭と平行して、きりんは初め頼りない母へ陰性感情を向け、母への依存をためらいながらも、母と同盟することで周囲に対する自己の構えを再編し、外にたち向かって行けるようになったと思われる。一方、母は家の中における自己の位置や祖母との葛藤を告白しつつ、母としての自己を確認して行ったようである。かかる経過の後、きりんは今までになく母に甘え、はしゃぎ、同時に母に対して自己を主張し、祖母に対しても祖母の意見をはねつけることができる程にも成長した。父は自らの頓座したものを見つめ、きりん姉妹に期待し、課していたものを意識化していった。「家」は主導権が祖母から父へと明らかに移り始めている。

学校社会への復帰に際しては、担任教師のC先生の協力を得て、きりんが学校社会へ出て行ける「しかけ」と保証が与えられる場面、いわば一種の「統合儀礼」が設けられたことに意義があったと考える。

考 察

以上、小児神経症と考えられる前思春期の少女きりんとの治療的な関わりの中から、発症経過、性格形成、家族的背景、社会・文化的背景、治療経過について論じた。

要約すれば、きりんの病態は「家」および父親から引き継いだ自我理想のイメージ、過疎の村から移住した「家」の新しい村での緊張、7代女系の伝統的農村家族の現在のひずみを反映しているように思われた。治療経過においては、きりんが母との安定した結びつきをもとに安定した同性同年輩関係を形成したと言えるが、全体的に見れば、三世代家族において座礁した家族の機能が、きりんの病態化を契機に再構成された過程であったとも考えられる。

1. 「家」の歴史と自我理想

きりんの性格形成について言えば、対他的

配慮とともに、自我理想をめぐる葛藤⁴⁾が問題となった。自我理想について、BLOS の述べる所を引用すると、「自我理想は自我の分化した部分⁵⁾であって、自己愛的あるいは同性愛的な備給を受け、超自我に似た指導的な役割を有している。それは超自我よりも遅れて、思春期前期の同性愛の段階において、初めて一定の体制に到達し、定型的には同性の親との同一化にその根本をもっている。」ということであるが、症例きりんにおいては単に親への同一化のみならず、親自身のもつ理想のイメージに従って自我理想が形成され、同時に村の中における「家」の在り方が大きな影響を与えたと考えられる。

そして、この症例が示唆するものは、性格を治療的に理解して行く場合に、父母をはじめとした家族の生活史、家全体の通時的な歴史と共時的な地域における関係性を理解して行くことが有用だということである。

2. ライフサイクルの視点

ライフサイクルの視点から発症の状況をみるときりんは「同性同年輩関係形成⁶⁾」という発達課題達成の危機⁷⁾にあったと考えられる。つまり、「家」に守られ、「家」から未分化な自己が仲間社会の自己として、親密な同性同年輩関係を形成し社会化していく過程で、仲間の中での自己の評価をめぐる葛藤、自立と依存の葛藤が露呈したといえる。

そして、きりんのみならず、父母は「親になること (parenthood)」、祖母は「家の中の役割を手放すこと」など、親子三代がそれぞれ、ライフ・サイクル上での次の段階に移行する発達課題達成の危機⁸⁾にあったと考えられ、それを理解した上での治療的な働きかけが有効であったと思われる。

かかる事例を理解する際、患者のライフ・サイクルに注目することは言わずもがなのことであるが、同時に症例に噛みあってくる他の家族構成員のライフ・サイクルへの理解と、さらに「全体としての家族」の家族サイクルへの理解が有用であるといえる。家族構

成員個々はそれぞれの時代と社会文化的背景の中で生き、そこに「ずれ」が生じてくることもあるが、幅の広い社会文化的規定性で捉えることによって、治療者に逆転移を起こさせかねない「悪い家族」のラベルも必要でなくなるであろう。

3. 家族の役割修正

治療過程については、箱庭療法を支持的面接と並行して行ったが、自我理想の緩和と、ライフ・サイクルを考慮した上で、家族の役割関係への介入を行った。つまり、SPIEGEL, J. P.⁹⁾のいう「家族成員相互の社会的役割に着目して、それを誘導し修正することにより均衡の回復をはかる」という方法を意図した。

きりんを巡り、家の中での役割関係が推移し、再均衡化をもたらし、母子関係は安定し、きりんは不協和感を減じたと考えられる。

4. 箱庭療法について

最後に箱庭療法¹⁰⁾について若干述べる。これはLOWENFELD, M. が子供のための心理療法の一手段として The World Technique (1939) を考案したことに始まり、KALFF, D. が JUNG, C. G. の分析心理学の考えを導入し、Sandspiel (1966) として発展させた治療法である。日本においては河合が KALFF に学び臨床導入への端緒を開いた。技法としては内法 57×72×7 cm の内側を青く塗った砂箱に砂を入れ、人・動物・木・花・乗物・建造物・橋などの人形・玩具を用い、自由に表現させることに始まる。治療者は傍でじっと見守り、これを味わうような受容的な態度で接するが、患者と治療者との間には「母と子の一体性」(KALFF) という信頼関係が存しなければならないとされている。治療者との信頼関係という母胎が確立できれば、箱庭は作らせるものではなく、自ら作られるものであるといわれる¹¹⁾。箱庭表現の解釈や味わい方は、統合性・空間配置・象徴などによっているが、全体として「主題の展

開」が見い出されることが多い。理論的背景についていえば、箱庭は意識と無意識、内界と外界の交錯するところに生じたものが造形され、視覚的な像としてあらわれたものであり、箱庭表現自体が自然治癒力を高め、自己実現の道を開き、あるいはイメージを拡大させ、自我を強めると言われている。また、保護された場を与えられ、そこで援助されるという意味もあり、主題の展開が意識化されることで患者の自己洞察に役立つこともある。¹⁰⁾

精神科での治療構造を構成する主な要素として「言葉」があるが、言葉自体には不十分性、不安定性が常に内在している。とくに、小児や思春期の症例の場合には、治療者側の問題も含め、言葉によるコミュニケーションがとりにくいことがある。時には身体言語で訴え、時には身体性さえ平衡を失っている年代なのである。言葉によるコミュニケーションがとりにくい場合には非言語的媒体が有効な手段であり、それには絵画・粘土・写真・箱庭などが選ばれる。治療者側の要件として常に重要なのは、自己表現にとって安全な、保護的な場で患者に表出をさせ、患者と治療者との間の治療舞台上で患者が共感されてある状態にうまく導くことである。

今回、示したきりんも緘黙がちで、言葉の「あやうい」症例であり、非言語的コミュニケーションが治療に有効であった。箱庭の中で治療者は患者の語れないが示すことのできるものを、さりげなく、象徴的に表象化させることでその心性のある部分を少しずつ掘むことができたように思える。

む す び

小児神経症の少女きりんとの関わりを通して、患児をとりまく社会文化的状況からの理解が治療的に有用であることを示した。そして、性格形成や前思春期の危機の分析から、村の子供達が、自己を取りまく村の中での「家」の在りかたを「自己」の中に取り込み、背負いながら存在することが示唆され

た。症例きりんにおいて、「家」の危機は患児に反映しており、その「家」は箱庭の中にも象徴的に示されていた。

本稿の成立は精神障害を社会文化的視点からとらえなおそうという青森社会精神医学懇話会の活動に基礎を置いている。熊谷輝、小井田潤一、伊藤立、中村馨をはじめとした懇話会のメンバーの間で症例検討が繰り返され、そこで育てた症例の見方から本症例との関わりが始まっている。懇切な御校閲を頂いた佐藤時治郎先生、箱庭について御助言を頂いた藤岡邦子先生、弘前大学教育学部附属養護学校の木村美津子先生に感謝致します。

終わりに、症例については実名を避け仮名を用い、内容も事実在即しつつ適宜変更を加えてあるが、記述が詳細になってしまった。事例との治療的関わりから浮かび上がってくるものをこそ大切にしたいと考えたからであり、事例分析の意義に代えて許して頂きたい。挿入した箱庭療法の図は著者の原図によるものである。

文 献

- 1) 野田正彰：初老期被罰症——社会精神医学の課題といわゆる初老期精神病への接近——。人文学報，第43号：103-151，1977。
- 2) 小此木啓吾：精神分析からみたうつ病。宮本忠雄編；躁うつ病の精神病理 2。249-279，弘文堂，東京，1977。
- 3) KRAUS, K.: Melanchliker und Rollenidentität. Melancholie in Forschung Klinik und Behandlung. 141-146, 1969.
- 4) 市川 潤：躁うつ病者の家族内力動——患者からみた両親像の変遷。精神療法，6：246-252，1980。
- 5) 田村雄一：発達史的にみた思春期。辻悟（編）：思春期精神医学。初版，26-32，金原出版，東京，1972。
- 6) LIDZ, T.: The Life Cycle. ARIETI, S. (editor): American Handbook of Psychiatry. I. 2nd ed. 241-251, Basic Books, New York, 1974.
- 7) 笠原 嘉：青年期——精神病理学から——。21-30，中公新書，463，東京，1977。
- 8) 逸見武光，広瀬恭子：人格発達と家族——Life Cycle の観点から。精神医学，15：1261-1270，1973。
- 9) SPIEGEL, J. P.: 文化的緊張，家族役割のパターン，精神的葛藤。HOWELLS, J. G. (editor): 家族精神医学。初版，367-389，岩

- 崎学術出版, 1970.
- 10) 河合準雄: 箱庭療法入門. 初版, 3-51, 誠信書房, 東京, 1969.
- 11) 山中康裕: 精神療法としての箱庭療法. 臨床精神医学, 8: 639-648, 1979.
- 12) 山中康裕: 思春期症例の治療構造. 精神療法, 6: 130-136, 1980.

**FAMILY DYNAMICS OF THE “IE-COMMUNITY” IN A TRADITIONAL
FARM VILLAGE AND PREADOLESCENT PSYCHODYNAMICS,
OBSERVED FROM THERAPEUTIC PARTICIPATION
WITH A NEUROTIC CHILD
A GIRL “KIRIN” WITH GAIT DISTURBANCE**

By

YOSHIAKI ANDO

*Department of Neuropsychiatry, Hirosaki University School of Medicine
(Director: Prof. T. SATO), Hirosaki, Japan*

This is the case of an eleven year-old limping and mute neurotic girl named by us “Kirin” (“giraffe” in Japanese). She seemed to express herself and her family by using several times a giraffe toy in “sand-play”.

The personality development of this girl was discussed from onset to healing, considering her family history and the socio-cultural background behind her.

“Kirin”’s neurosis seemed to be due to 1) her distorted “ego-ideal” image, taken from her father and “Ie”-community (“Ie”: “house” or “family” in Japanese) which by kinship obliges each member to devote himself to it, 2) a psychological family tension in a village where she and her family have recently migrated from another more sparsely populated region, 3) a parental role confusion in her family; her family is a traditional rural one descending in female line for seven generations.

In order to understand her deeply, not to neglect the socio-cultural background behind this patient must also be stressed.

Through analysis of her personality development and her crisis in the preadolescent stage, it could probably be generalized that the mode of existence of people in the village could not be free from the style of their own “Ie”-community.

It was thought that the crisis in the “Ie”-community, seen on this patient, also appeared symbolically in “sand-play”.

(Autoabstract)

KEY WORDS : childhood neurosis preadolescence
 family dynamics socio-cultural psychiatry
 sand-play

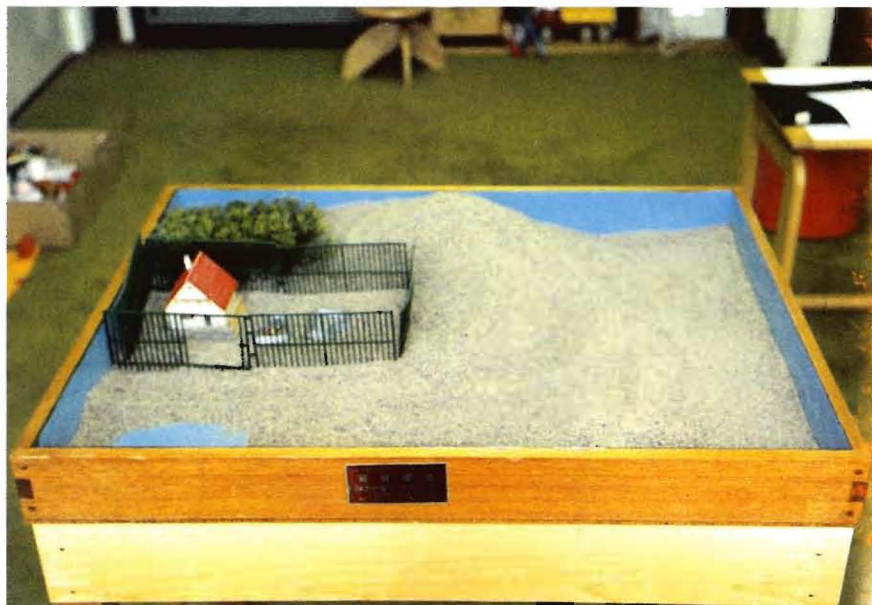


Photo. 1 (箱庭 第1回)



Photo. 2 (第3回)



Photo. 3 (第5回)



Photo. 4 (第7回)



Photo. 5 (第9回)



Photo. 6 (第11回)